

図画工作科指導要領についての考察

A Research of Some Problems between Arts' "Revised Course of Study and Former Course of Study" of Primary School in Japan.

大 蔵 善 雄

目 次

- I まえがき
- II 図画工作科授業におけるカリキュラムの問題点及び指導案作成にともなう困難性と、その打開について
- III 新旧指導要領の問題点および移行にともなう問題点
- IV 旧指導要領にもとづく現行の図工科授業の実態と問題点
- V 上記諸問題点の考察と打解の方法
- VI あとがき

I まえがき

筆者はおりにふれ図画工作科授業の効率性についてふれてみたいと思っていた。

今回新旧の移行措置が行なわれるにあたり、機会をえて考えをまとめてみたが、この問題には多くの疑問もあり、判明しない要因も沢山あることがわかった。

図画工作科は範囲が広すぎる。

領域が分化されすぎている。

学校、教室の条件整備が出来ていない。

教師自身の取り組み方の問題。

教師の養成過程に問題がある。

更にカリキュラムの問題と実際の授業をとりあげてみたが、特に今度は新旧指導要領の移行にともなう諸問題に焦点をしばり、この点からカリキュラム問題に近づいてみた。

II 図画工作科授業におけるカリキュラムの問題点、及び指導案作成の困難性と、その打開をいかにすればよいか。

これは非常に大きな問題であると思うので、改訂の移行措置が行なわれるのを機にとりあげてみた。

指導書を通読して感じたことは次の2点である。

図画工作は範囲が広すぎる

領域が分化されすぎている

総説の中で改訂の要点として、「領域ごとに整理統合して教科の目標を明確にする」とあるが、書き下しになっている目標と内容は、極めて広範囲であり領域が分化されすぎている、旧指導要領に比較して余り変りばえがしないように思う。ただ主目標として、「児童の美的情操を養い、創造性を高める」ことをねらいとしていることはわかるが、多岐にわたる図工の授業の難しさがここでもうかがわれる。

そこでカリキュラム及び指導案を作るには、先づ教師自身の材料体験が必要であると思われる。造形活動は言葉や音響の手段によるものではなく、物的な材料によって実験するものであり、意識的、組織的な構成をやらせることである。そのため、まづなにより大切な事は、自分の体験によって、各種の材料や道具がもっている性質や可能性を体得しておかねばならない。又このようにしたらよいという固定概念や先入観をとりのぞいてやるためにも、教師自身いろいろな知識を体得しておかねばならないと思う。

そのような経験にもとずいて指導案をたてると、時間配分もうまくいき、展開も思い通りになるであろう。又寸評をとり入れた「まとめ」をかみならずおこなうことを忘れないようにすることも大切である。

図画工作のような造形教育では、導入の部分が非常に大事である、しかも限られた短い時間で説明し、制作させなければならないので導入に時間がとれない場合が多い。その場合は、身近な参考作品を用意し、説明は簡単で要を得たものにするよ。

又あとでも述べるが、カリキュラムや指導案をたてる時教師自身、その教えている他教科との有機的な結びつきを充分生かすべきである。

指導案のたてかた、(計画)としては可能なかぎり魅力のあるプログラムが必要であり、かつ内容をともな

たものでなければならない。すなわち以上の条件を箇条書にすると以下になる。

イ、いつも同じような変化のない風景や静物のスケッチをやらせてはいけない。

ロ、同じテーマでも見かたや考えかたを変えて、観察させることが必要である。

ハ、指導要領や指導書をよく読んで、指導目的や方法を全体的に理解し、さらに細かく分析してみることも大切である。

ニ、全教科の中での図画工作のあり方を考え、他教科と結びつけて指導案をつくる。

ホ、児童生徒の欲求、興味などについての実態調査を行い、その結果を研究する。

ヘ、各領域（図画工作における）の内容について研究を深め、技術的にわからないところは説明書や、指導書をよみ授業にそなえて視聴覚教具その他の教具、作品を

十分に用意しておかねばならない。

ト、今まで自身で経験したことだけにとどまらず、新しい感覚での指導計画をたてるよう努力すべきである。今までに同じ教材で指導した指導計画があれば、参考にして必ず目を通すこともよいであろう。ただし、そのままの模倣にならないようにすることが大切である。

指導案については、いろいろな書き方があるが、だいたい書式は良く似たものである。ただ導入時のことはなるべく詳しく書いておいた方がよい。又、指導上の留意点は明確に記入しなくてはならない。まとめについては、あらかじめ用意しておく方がよい。

つぎの実例は本学の実習生がそれぞれ現場において制作したものに筆者が修正を加えたものであるが参考として掲載しておく。

(A例)	学 習 活 動	指 導 留 意 点	時 間	資 料
美術科学習指導案 指導者 山形久美子 題 材 ポスター「高崎山、マリンパレス」 指導目標 イ、ポスターの機能と必要条件を理解させる。 ロ、計画性のある制作によって目的にあった構成や色彩計画を行う力をつける。 指導計画 (四時間) 第1次 { ポスターの理解 構 想 第2次 { 制 作 鑑 賞 準 備 教師 鑑賞資料、西洋紙 生徒 教科書、資料、4切画用紙、水彩絵の具、パレット、筆(大・中・小)筆洗・その他表現材料	1 ポスターの機能や必要条件について話し合う	・ポスターの役割とは何かについて理解させる ・表現のねらいや配色効果イラストレーション、レタリング、レイアウトにわたってよいポスターの持っている条件をとらえさせる	15分	鑑賞資料 機能、必要条件のあきらかなもの 構成、色彩の美しいもの
	2 テーマに即してイラストレーションのアイデアスケッチをさせる	・何が一番いいか、どこを表現したいか、ねらいをはっきりさせる ・用意した西洋紙にアイデアをかかせる	20分	ねらいのあきらかなもの
	3 レタリングのアイデアスケッチをさせる	・イメージに合ったレタリングを考えさせる ・読みやすい文字 ・感じの出ている文字 ・美しい文字	15分	レタリングの種類
	4 イラストレーションとレタリングのレイアウトをさせる	・画面に安定があり見やすく美しい配置をさせる ・西洋紙に画いたイラストとレタリングを用意した画用紙に大きさや位置を考えさせながら配置させる	20分	レイアウト練習作品
導入時にポスターの種類について説明する ・イ) 行事ポスター ロ) 観光ポスター ・ハ) 掲示ポスター ニ) 指示ポスター ・内容を知らせる魅力がなければならない ・良いポスターの条件 イ) 目だつ(人をひきつける) ロ) 内容がよく表われている ハ) 印象に残る ニ) 美しい	5 色彩計画をたてる	・配色練習を思い出させながらイメージにあった明示度の高い色彩を配色させる ・色名帳を使用するとよい ・色名帳がないときは、色かずの多い色紙をとじて適當の大きさに切り使用してもよい	15分	配色練習作品
	6 制作			制作
	7 鑑賞			
	まとめ	1 ポスターの機能や必要条件が正しく理解できているか。 2 計画的な制作方法に従って意図したことを表現できたか。		

図画工作科指導要領についての考察

(B例)	学 習 活 動	指 導 留 意 点	時 間	資 料
美術科学習指導案 指導者 古木行雄 題 材 クロッキー素描 指導目標 イ 素描の美しさを発見させ、素描の意味を理解させる ロ 表現材料を変えたことによって違いを理解させ、その特徴を生かす ハ 対象物を感覚的に把握させる 指導計画 50分 導 入 10分 展 開 35分 ま と め 5分 準 備 教師 イ 自分で画いたクロッキー作品 ロ ロダンやマリノ・マリーニのクロッキー ハ 生徒の作品 生徒 マジックペン 8切画用紙3枚	クロッキーの説明 作品の鑑賞	・マジックペンを使用し鉛筆と違った表現効果があることをわからせる ・プロポーションについて教える ・線の性質を理解させる ・作品の批評をして、良い点をほめ本時の注意点を考えさせる	10分	・指導者作品 ・生徒作品 ・ロダンやマリーニの作品
<ul style="list-style-type: none"> ・導入時に指導者の作品を見せ生徒の作品と比較しながら説明を加える ・人体のプロポーションの表を画き、モジュールの話を入れて、わかりやすく説明する ・描写中の説明はしない方がよい ・比較批評 一人の生徒の比較批評で個人ののびを見るとよい ・机間巡視をしながら作品として問題のあるものをあらかじめさがしておくこと 	1 立像 10分 (普通ポーズ) 作品の中から良いものを選び鑑賞批評する	・モデルをよく見て、特徴をとらえて思いきってかかせる ・全体の寸評を加えて机間巡視をする ・モデルの動きについて注意する ・他人の作品を見ることによって自分の作品との比較をさせる ・各作品の批評をさせる	批評 5分	
	2 立像 5分 (手を腰へ)	・全体をかく事を注意し大まかにかかせる ・時間を短かくする事によって全体をかかせる ・参考作品を見せ線の美しさ、形の適確さなど要領を理解させる	5分 5分	
	3 立像 5分 (全体に動き)	・特に線の動きに注意しながら画かせる	5分 5分	
	ま と め	1 寸評を加えよくなった事を指適する。 2 感想をいわせて今後の参考にする。 3 作品を一枚だけ選び提出させる。		

以上の指導案に対する説明

A例) ポスターの制作

ポスターの制作では、一般に導入部分として、学習活動の(別表指導案A例参照)展開

1でポスターの機能や必要条件について話しあいをさせ、表現のねらいなどを説明したうえでイラストレーションさせていたことと思う。A例では展開の

2でテーマに従って、イラストレーションのアイデアスケッチをさせることにした。これは生徒自身、なにが一番いいか、どういうことを表現したいのかについて目標をはっきりさせるためである。

ここではアイデアスケッチを3点ぐらい約20cm×20cm程の大きさの西洋紙に画かせ検討させる。この段階で指導が必要となる、次にその中で一番適したものを自分で一点選ばせる。

3ではレタリングのアイデアスケッチを別の西洋紙に画かせる。これはイメージにあったレタリングを考え

させるのが目的である。すなわち、

イメージがよくあらわれている文字
読みやすい文字

はっきりした形 などが大事な要素である。

4では2のイラストレーションと3のレタリングを組合せてレイアウトさせる。これは与えられた画面をいかにうまく処理するかにある。安定感があり、見安く、美しいことが条件にあげられる。

5の色彩計画は形と一緒に構成の大切な要素として、基礎能力として取り扱われている。色の色相、明度、彩度や互に隣りにくる色などを考えて効果のある計画をたてる必要がある。手段としては基調色を考えたら、それを基準にして、色名帳を使用し色彩計画をたてるべきである。(簡単な色名帳を作るには、市販されている色研などから出ている色紙を短冊に切り使用すると便利である。)

B例) クロッキーのかき方

クロッキーでは感覚的にものをとらえ、自由にマジックペンで線をえがかせる。導入部分として、学習活動展開（別表指導案B例参照）

1で今まで鉛筆で画いていたものを、マジックペンで書き表現効果の違いをわからせる。

2で大切なことは人間のプロポーションを表にして見せるとよい。この場合の表はスタイル画でかくような8頭身の絵ではなく、生徒の年齢に応じた日本人平均のプロポーションの表である必要がある。

3プロポーションの説明の中で、ル・コルビジエのモジュロール（黄金尺）に触れ生徒にルート矩形や黄金比についてわかりやすく解説しておくことよい。

4では速い線、ゆっくりした線、流れる線、折れた線、太い線、細い線、などさまざまな線の性質を理解させる。

5で大事なことは指導者自身の作品である。4.5枚の指導者による作品を示し、あわせて生徒作品を示し、導入することが創造性教育の大事な要素であると思う。

展開部での寸評は大切な要素ではあるが、はじめの説明とあとの説明に分け、描写中に行なわれる不用意な全員に対する説明は、かえってマイナスであると思われる。

なおまとめのところで、有名な画家や、彫刻家によるクロッキーの作品や複製を見せながら説明を加えておくことよい。

動く立体をすばやく平面にかきうつすのがクロッキーである。クロッキーという言葉は人物の速描みたにとられているが、もっと広義に解釈すべきであり、画家を志す人でなくても、クロッキーをやっておくと大変便利である。

クロッキーをさせる大事な目的の一つに、ものを大きくつかまえさせること。またすばやくものをつかむには速くペンを動かさなければならないことなどがあげられる。

またクロッキーは、短時間で数枚の作品が出来上るので同一個人に対する比較批評を行い、本人ののびを見つけてやる事が出来る。

Ⅲ 新旧指導要領の問題点および移行にともなう問題点

指導要領で示された各学年の内容は書き下しになっていて、一見しただけでは解りにくい点があるので、新旧指導要領の目標および、各学年ごとの新旧指導要領の内容をそれぞれ比較して表にまとめてみた。

次に新指導要領の主な問題点を取り上げてみた。

1 各学年の指導内容は、それぞれ5つの項目から成り

立っているが、これらの項目は図画工作を全体としてとらえている。

- 1) 心象にもとづく表現を主とした学習
- 2) 目的をもった機能的表現を主とした学習
- 3) 色や形など造形の基礎を主とした学習
- 4) 材料、用具の取り扱いを主とした学習
- 5) 鑑賞を主とした学習

2 各学年にわたる内容の取り扱い

イ) 各学年の内容に示す各領域の授業時数の配当の割合は、だいたい別表の通りである。ただし鑑賞の指導は第4学年までは、主として他の各領域の表現活動に付帯しておこなうことになっている。

	平 面	立 体
心象表現	絵 画 版 画 (40%)	彫 塑
機能的表現	デザイン (15%)	工 作 (40%)
鑑賞	鑑 賞 (5%)	

ロ) 各領域の内容は、それぞれが孤立しないようにし、互に関連させて指導することが必要である。なかでもデザインと工作は、デザインし、作り、使うなどの一貫した指導を行なうなど、特にその関連を考慮して指導することが大切である。

3 図画工作科の時間数

図画工作科の指導要領は大別して絵画（版画を含む）彫塑、デザイン、工作、鑑賞となっているが、ちなみに1年にわたる時間数をしらべてみると次のようである。

第1学期	15週
第2学期	16週
第3学期	12週
計	43週

普通年間43週から40週ぐらいの予定で時間数が組まれている。1学年から6学年まで、それぞれ週2時間とされているので年間の履習時間は80時間程である。

この80時間が指導する人の主観で減らされるのは問題である。

さて、指導要領の内容に関する比較表を書きおえた段階で次のようなことを感じた。それは絵画、彫塑、デザイン、工作、鑑賞といった各領域内の関連性が密でなければならない。またそれぞれの領域が他教科と有機的に結ばなければならないということである。

図画工作を狭義に解釈して従来どおりの絵をかかせるだけの授業でおわってはならない。

新旧指導要領の目標に関する比較表

旧指導要領 (目標について)	新指導要領 (目標について)
<p>昭和33年から昭和45年まで使われてきた旧指導要領は昭和26年度版指導要領がもとになり、相当の論議をつくして作られたものである。それから10年たち今又移行される時期になった。</p> <p>新旧指導要領に共通する項目は「目標」と「各学年の目標と内容」とであるが、新旧にあって相当の違いがあるので、その違いの概要をみてみたいと思う。</p>	<p>小学校における図画工作科の目標は、小学校図画工作の教育が、どのようなねらいから、何について指導し、どのような能力、態度、習慣などを身につけさせたらよいかということの根本を示すものである。</p> <p>尚新指導要領は昭和46年4月から施行される。</p>
<div data-bbox="159 750 758 851" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>① 絵をかいたりものをつくったりする造形的な欲求や興味を満足させ、情緒の安定を図る。</p> </div> <p>図画工作の教育を通して人間性の形成に大いに役立たせなければならない。</p> <p>造形的な欲求を満足させて情緒の安定を計ることは図画工作教育の根底であり、出発点ともいえるものである。</p> <p>また低学年から高学年までに通じての目標となるものである。</p>	<div data-bbox="837 750 1436 851" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>① 色や形の構成を考えて表現し鑑賞することにより、造形的な美の感覚の発達を図る。</p> </div> <p>造形的な美の感覚の教育は、一朝一夕でその成果が得られるものではなく、図画工作での表現や鑑賞の教育をたえず営み、その積み重ねによって次第に高めていくべきものである。</p>
<div data-bbox="159 1176 758 1310" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>② 造形活動を通して造形感覚を発達させ、創造的表現の能力を伸ばす。</p> </div> <p>ここでいう「造形感覚」というのは単に視覚、触覚運動感覚ないしは空間感覚だけを意味するものでなく、それらに関係ある感動、感受、感性のような精神作用も含む。</p>	<div data-bbox="837 1176 1436 1310" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>② 絵であらわす、彫塑であらわす、デザインをする、又鑑賞することにより、造形的に見る力や創造する力をのばす。</p> </div> <p>造形的に見る力というのは、事物やことがらを客観的にくわしく見る自然科学的要素も含まれていると思われるが、指導要領では「感じる見方でいい」としている。しかし、他教科との有機的な結びつきを図画工作がとるべきだという立場で考えると単なる「感じる見方でいい」というのは少し甘すぎると思う。</p>
<div data-bbox="159 1601 758 1691" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>③ 造形的な表現や鑑賞を通して美的情操を養う。</p> </div> <p>情操の安定をはかればそれは必然的に情趣に発展し、さらに情操の発達となるが、もともと情操という意味は本来の意味にとられないで、もっと浅い表面的にきれいな美的趣味くらいにとられがちである。われわれは正常な図画工作の授業を通して情操を理解させたいと思う。</p>	<div data-bbox="837 1601 1436 1691" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>③ 造形活動に必要な初歩的な技法を理解させるとともに造形的に表現する技能を育てる。</p> </div> <p>この第3項は非常に大事なことである。図画工作など表現活動をとともう教科では、材料とか用具などによって具体的に作品として形づくられていくものだけに、そこには当然技法というものが存在することになる。授業を通して材料や用具などの扱いをはじめ、さまざまな表現方法と技法を適切に指導するよう務めなければならない。</p> <p>技法の指導で大切なことは、児童がわにたって必要性ということとうまく密着して、表現活動が円滑に生かされるよう配慮されなくてはならない。</p>

旧 指 導 要 領 (目標について)	新 指 導 要 領 (目標について)
<p data-bbox="169 371 767 510">④ 造形的な表現を通して技術を尊重する態度や、実践的な態度を養う。</p> <p data-bbox="161 524 767 801">技術を重んずるという考えかたは旧指導要領を作るときの一つの主張であり、技術、家庭科えのつながりとして考えられた。「技術」ということばはいろいろにとられるが、多くの場合ものを生産する過程を意味する。狭義には生産の過程を意味し、技法、技術、手法などのような観念的生産、芸術的生産などは含まないものであるが、広義には技法、技術、手法などの意味も含める。</p>	<p data-bbox="850 371 1461 510">④ 新指導要領の総括目標は造形活動を通して、美的情操を養うとともに創造的表現の能力をのばし技術を尊重し造形能力を生活に生かす態度を育てる。</p> <p data-bbox="850 524 1461 801">これは上記①②③の目標の総括目標である。図画工作の学習は、ものを画いたり、作ったりする児童の経験的な実際活動を通しておこなわれるものであり、その活動そのものに大きな教育的意義がある。したがって美的情操、創造的表現、技術に対する教育が単なる知識や理解による教育でなく、具体的な造形活動を通して行なわれるところに図画工作教育の意味がある。</p>
<p data-bbox="169 887 767 981">⑤ 造形活動を通して、造形能力を生活に生かす態度を養う。</p> <p data-bbox="161 994 767 1352">この項は最初、造形的適応力をつける、あるいは適応力への方向づけをするというねらいがあった。ここでいう適応力とは、人間はつねに造形的環境に対応することによって生活を営んでいる。このことは子供も大人も変りない。人間は造形的環境を自分の生活に都合のよいように変化させるか、自分を変化させて造形的環境にあうようにしなければ、スムーズな生活は出来ない。図画工作教育は、造形面においてこの適応力をつけることがその使命だといってもいいすぎではない。</p> <p data-bbox="161 1361 767 1509">以上で目標各項の説明はおわりであるが、この旧指導要領の目標は、表現活動、鑑賞活動、適応活動を通して子どもの成長発達をたすけ、人間形成に寄与するということがねらいである。</p>	

図画工作科指導要領についての考察

新旧指導要領の内容に関する比較表

小学校1学年の部

33年

43年7月11日, 文部省告示第268号

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<ul style="list-style-type: none"> ◎「絵をかく」「版画をつくる」の領域を統合。 ◎「身近に興味あるものをかく」の内容は三年からの「観察して表現する」につながる。 ◎「生活経験」には児童の記憶や想像, 空想などによるものを含め「色紙などを使ってあらわす」は, はり絵で表現するなどを含めて指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ありのうち ○せんせい ○えんそく ○のりもの ○すきな絵 ○うんどうかい ○こすりだし ○かみ版画 ○どうぶつ ○はり絵 ○うちの人の仕事 	<ul style="list-style-type: none"> ○絵をかきたい物を造りたいという欲求を満足させ表現に対する興味を起させる。 ○何をどのようにかき, 何をどのように作るかについてある程度心の中にくふうさせる。 ○のびのびとした創造的表現を通して, 喜びと自信をもたせる。 <p>描画の種類 { 想画 主題画 写生</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いろいろな表現材料や用具を扱うことを経験させる。 ○いろいろな美しいものを見ることの喜びを味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○見たこと, 感じたこと, 考えたことなどを, すなおに表現させて造形する喜びや意欲をもたせる。色を使うのもよい。 ○生活経験をもとに自分のかきたいものをかく。 ○自分のかきたいことを思いのままかく。 ○身近に興味あるものをかく。 ○ものの色や形を考えてかく。 ○自分なりにかき方をくふうする。 ○クレヨン, パス等を主とし, 必要に応じて水彩絵の具, 色紙などを使ってあらわすことが出来るようにする。 ○身近なものを使い, その形を生かし, 押ししたり, こすったりして版画にする。 ○紙その他扱いやすい材料で簡な版をつくり版画にする。
版 画			<ul style="list-style-type: none"> ○版画をつくる 生活版画 プリント版画 	
彫 塑	<ul style="list-style-type: none"> ◎彫塑経験は粘土だけでなく紙, 小枝などでもさせる。 ◎教科書の「いろいろなものを作る」の内容は彫塑的な取り扱いで学習する。 ◎粘土学習の用具は粘土板が示され, 表現は手だけで作るようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ねんどあそび ○粘土をちぎったり, まるめたりして遊びの中で好きなものを作る ○粘土で自分の顔をつくる ○ねんどを使って友達や先生を作る ○ねんどの動物 	<ul style="list-style-type: none"> ○粘土を主材料としていろいろなものを作る。 ○粘土とはどんなものか } いじくりを充分させる。 ○粘土でなにが出来るか } ○まるめたり, へこましたり, 板にぶっつけたり, ひもを作る。 ○遊戯的, 自然発生的な方法をとる。 ○与える粘土の量と形。 <p>(アメリカなどではドーフ粘土といってメリケン粉に塩と色素をいれたフワフワしただんご状の粘土をさかんに使用している)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○感じたことや考えたことをもとに身のまわりの興味ある事物をつくることができるようにする。 ○人物, 動物, 器物など, 自分であらわしたいものをつくること。 ○つくるものの形や大きさを考えてつくる。 ○粘土を主とし, その他身近な材料でつくれるようにする。 ○粘土をつかって自由に表現し, その扱いに慣れる。 ○紙や小枝など身近な材料を使ってつくる。 ○粘土板を使い, 手づくりを主とし穴をあける, 筋をつけるなど必要に応じて身近なものを用具として使ってつくるようにする。
デ ザ イ ン	<ul style="list-style-type: none"> ◎目的をもった装飾」と「基礎になる構成練習」に分類。 ◎内容的には身近を飾ったり, 基礎的な構成練習は教材の中に含んでいるが, 自他の区別をする印のようなものを加える。 ◎色彩は色を使う経験を主におぼえさせる。 ◎まる, さんかく, しか 	<ul style="list-style-type: none"> ○まる, さんかく, しかく ○こいのぼり ○わたしのせき, 教室の自分の席をうちの人にわかるように工夫してかく ○わたしのうち, みんなに自分の家がわかるように工夫してかく 	<ul style="list-style-type: none"> ○模様を作る ○人間と模様 装飾本能を使って飾ると美しくなることを教える。 ○デザインの基礎としての模様 ○ものを並べること } あらかじめ計画をたてること, 材料, 色 ○リズムを表現する } 彩, 大きさ。 ○バランスを考える } ○模様作りの方法 プリント, 事物を並べる。貼り絵, ステンシル, 線あそび。 ○色彩教育と模様 配色指導, 色を使うことを教える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○興味をもって簡単な身近なものの飾りや, 知らせるものをつくることができるようにする。 ○身につける飾りや教室の飾りなど, 身近な飾りをつくること。 ○自他の区別がはっきりするようならしなどをかいたりつくったりすること。 ○色や形などで, 自由な組み合わせや組み立てができるようにする。 ○かいたり, はったり, 並べたりして, 色や形などの自由な組み合わせ

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
デザイン	くなどの形のなかでしかくなら、しかくを正しく並べる練習をする。	<ul style="list-style-type: none"> ○いろの名前 ○きのはあそび ○きれいな鳥 	<p>◎色名を教える、白、くろ、灰、きいろ、みどり、あお、むらさき、あか、だいだい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○せをつくる。 ○好きな形を選んだり、箱その他身近な材料で自由な組み立てをつくる。 ○好きな色で配色したり、色名をおぼえたりする。 ○材料用具は絵画や工作などで扱うものを用い、興味をもって自分なりに表現できるようにする。
工 作	<p>◎立体的な人物、動物などを作る活動が彫塑の領域になる。</p> <p>◎簡単に動くものの内容が加えられ、水に浮く船、空箱で動く乗りもの、紙飛行機や風車など理科の学習と関連させて作る。</p> <p>◎作り方や用具材料の技法は子どもの能力に応じて正しい使い方、正確な作業をする指導をする。</p> <p>◎児童のすなおな着想を重んじ、むづかしい機構や技法を押しつけることなく簡単な材料や用具を経験させて表現の意欲を高めることが必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○とけいを作る ○きれいな魚 ○つるすかざり ○はこを使ってあき箱をあつめ立体的な動物や乗り物をつくる。 ○ふくろを作る ○うごくおもちゃ ○ビー玉、箱 ○おめん 	<ul style="list-style-type: none"> ○いろいろなものを作る ○人間は早い時期に体全体で理解するという機会を失うと、おとなになってからも、全身で感動したり味わったりする大切な感覚を失う。 ○身近にある自然材料や大工材料等のいろいろな表現材料になれさせる。 ○平易な用具の使用に慣れるようにする。 ○自由なものを作ることと題を与えて作る。 ○作り方の指導は作り方の順序、やくそくごとの指導はするが子どもの創造性を助長し、これを発見したときは大きくとりあげのばさなければならぬ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で使う簡単なものをつくることができるようにする。 ○自分で使ったり、遊んだりするものをつくる。 ○自分の考えでつくることを主とし、必要に応じて紙の切方や折り方などを理解させる。 ○興味をもって簡単な動くものや家などをつくることができるようにする。 ○おしたり、ひいたり、水に浮かべたりして動くおもちゃをつくる。 ○どのようにしたらよく動くかを考えてつくる。 ○画用紙を切ったり、折ったり、曲げたりして家をつくる。 ○紙類をおもな材料とし、興味をもってつくることができるようにする。 ○色紙や画用紙をおもな材料とし、あき箱その他身近なものを使って作る。 ○はさみやのりなどの使い方になれる。
鑑 賞	<p>◎自他の作品を鑑賞すると共に大人の作品にもふれさせる。</p> <p>◎自他の作品を鑑賞する際にそれをどの程度にとどめるか移行期に考える。</p>		<p>◎自他の作品を鑑賞する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○かいたりつくったりしたのを見ることが関心をもたせ、その作品をたいせつにすることが出来るようにする。 ○自分の作品について話をする。 ○友だちの作品をみて話しあう。 ○身近にあるもので色や形の好きなものに気づかせる。 ○親しみやすい絵画や彫塑などの作品に関心をもたせる。

図画工作科指導要領についての考察

小学校2学年の部

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<ul style="list-style-type: none"> 「かくもの」のテーマは、子どもを中心にした生活経験と身近の興味あるものをかく内容が、この学年でとりあげられている。 「表わし方」について「想をしっかりとめてからかく」ように指示している。 版画の材料として押す版画とする版画がない。石こう版画を削除して一年の経験のくりかえしとして教材を補充している。 「生活経験」「色などを使ってあらわす」については第1学年の児童の記憶や想像、空想などによるものを含む、と同様に扱うとともにいっそう児童自身のものの見方や感じ方を深め表現の技能を深めることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 花 そうじの絵 友達とあそんでいる絵 先生の絵 夏休みのこと 工事現場 みたこと はんが（発泡スチロール） お話し絵 不思議な乗り物に乗った絵 お母さんの絵 かみはんが 石膏はんが 	<ul style="list-style-type: none"> 想画の重視 記憶想像による絵、つまり知的レアリズムな絵をかかせる。 写生的活動の場合も視覚的レアリズムでなく自分の思ったこと考えたことをつけ加えて経験として心の中にもっているものをかく。 記憶による画（動物園）想像による画（海の中）回想による画（幼ない頃）空想による画（鳥になったら）幻想による画（夢にでてきたおばけ）構想による画（花だん）連想による画（デカルコマニー） 題を与えてかかせる絵 雨ふり、お祭り、花火、うみの中、つなひき、お話し絵、しんたいけんさ。 技法指導と創造性 子ども自体を表現の内容と方法をみとめてやるべきである。 言語の役割を絵ではたすことによって子供の創造的表現を進展させる。 創造的な表現の条件 内容が豊かである、いきいきとしていて明るい力動感がある、のびのびとしている。 何をかくかがはっきりしている。 いろいろな描画材料を経験させるとともにその材料についての知識をひろめる。 	<p>感じたことや考えたことを、はっきりかくことができるようにする。</p> <p>生活経験をもとに、自分を中心にしたりかきたいものを選んだりしてかく。</p> <p>あらわしたいことをしっかりかく 身近の興味あるものをかく かくものをはっきり決めてあらわすことができるようにする。 かくものに合わせて色や形を考えてかく あらわし方をくふうして思ったとおりにかく クレヨン・パス類を主とし、必要に応じて水彩絵の具、色紙などを使ってあらわすことができるようにする。</p> <p>簡単な版画であらわすことができるようにする。 身近なものを使い、その形を生かして、押しつけたり、こすりだしたりして版画にすること 紙その他簡易な材料でくふうして版をつくり版画にする。</p>
版 画			<ul style="list-style-type: none"> 版画をつくる （材料抵抗の少ないもの） 押す版画 リノリューム版発泡スチロール板 紙版画 硬土版 石膏板 うつしとる版画 すりだす版画 フロッタージュ すりこむ版画 ステンシル 	
彫 塑	<ul style="list-style-type: none"> ◎「作るもの」は大体同じであるが、粘土の量をできるだけ多く与え、手で作ることを通して立体感を体験させる。 ◎材料による彫塑経験は「画用紙の動物」などの学習で配慮する。 ◎充分な量の粘土を与え大きくつくらせる。へら等を与えず手づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 好きな動物 話に出てくる変った人物 動物に乗った人（自分を主とした） 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土を主材料としているいろいろなものを作る。 彫塑的なもの、 （人とか動物） 工芸的なもの、 （ちゃん・つぼ） 幻想的なもの、 （火星人・怪じゅう） 抽象的なもの （円型や球形） 粘土の可塑性を教える。 視覚と触覚がむりなくつながり、 	<p>感じたことや考えたことをもとに、身のまわりの事物をつくるようにする。</p> <p>人物、動物、器物、その他身のまわりの興味あるものをつくる。 つくるものの感じがでるように、形や大きさを考えてつくる。 粘土を主とし、その他身近な材料でつくるようにする。 粘土を使い、その性質に気づきながらつくる。 紙その他身近な材料の使い方をく</p>

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
彫 塑	を通して材料の量を感じとらせることが必要である。		造形表現の基礎づくりをする。 体動性（ボディ・ムーブメント）を大いに生かすこと （粘土は相当量当えること）	ふうしてつくる。 粘土板を使うほか、必要に応じて、身近なものを用具として使ってつくられるようにする。
デ ザ イ ン	<ul style="list-style-type: none"> 「押したり、ならべたり、はったり、かいたりしてきれいな模様をつくる」が「飾るもの」「知らせるもの」「基礎的な構成練習」の三つに内容が整理された。 「知らせるもの」の内容としてこれに合う教材がないので、身近な伝達の教材を追加する。基礎的な構成は、模様作りの教材を通じて育てる。 配色の経験は寒暖が三年に加えられたので削除。デザイン作品の鑑賞を通じて好きな配色に関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 花をならべたもの はり絵 自分で旗を作る 自分で考えて美しいきれいな旗をつくる 木をいっぱいかく 同じ種類のものの形をたくさん切りぬいて台紙にはり模様をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模様をつくる 立つ模様を考えさせる。模様は平面的なものがあるが使われるときは主として、立体にまきつけてある姿の方が多い。 模様づくりの種類 描画的模様（動物や木などをくりかえしかく） パチック模様（ローソクやクレヨンの排水性を利用） 貼り絵の模様（色紙、布、実物をはる） プリント模様（捺印、ステンシル） 染め紙、切り紙模様 型とり、こすりだし 色彩との関連を考えさせる。 色→寒暖と中間色を教える。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近なものの飾りや、知らせるものをつくることができるようにする。 身につける飾り、行事に関連した飾りなどをつくる。 行事に関連した知らせることなどを、かいたりつくったりする。色や形などの違いに気づいて自由な組合わせや、組み立てができるようにする。 かいたり、はりつけたり、並べたり、色や形などの自由な組み合わせをつくる。 形の違いとその感じに気づいて好きな形を選んだり、箱その他身近な材料で自由な組み立てをつくったりする。 色あいの違いを見分け、好きな配色を選んだりつくったりする。 材料、用具は絵画や工作などで扱うものを用い自分の考えや方法で表現できるようにする。
工 作	<ul style="list-style-type: none"> 作る教材としての内容に「水の流れや、風などで動く簡単なおもちゃを作る」が加わる。 材料用具の経験については、内容の取り扱いで「材料用具の経験が進むと共に、必要な技術を少しずつ身につけさせる」とあり、技能的な能力を適確に自分のものにする指導配慮が必要 工作においては、児童自身の考えや工夫を大切にす。また、ものさし等の必要な技能や材料、用具の経験をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 画用紙で動物を作る せのたかい美しいたてもの 浮く船 空箱を使った町 人形をつくる あきびんなどで見る人形 粘土をつかって動く人形 動くおもちゃを考える 画用紙で鳥をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろなものを作る 遊びとしての工作で創造性を伸ばしていこうという考え方 紙類、色紙、中厚紙、段ボール、包装紙、セロファン、新聞紙、ちり紙、でつくる。 豆、貝がら、どんぐり、木の葉、木の枝、花等の自然物でつくる。 布きれ、毛糸、わた、包装ひも、ビニールひも キビカラ、ヒゴ、ワリバシ、針金 板きれ、ベニヤ、経木 空かん、空びん、びん口金、ビ一玉 構成的な題材 <ul style="list-style-type: none"> 一枚の紙から立つ工夫 クリップ洗たくばさみ、石、空ばこをつかってつくる。 ドリル的な題材 <ul style="list-style-type: none"> くつつける工夫、切り方の工夫、曲げ方、組立て方の工夫、使い方の工夫 集団的な題材 ◎動詞的題材、高くつむ、長くつなぐ 立つ動物をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で使う簡単なものをくふうしてつくることができるようにする。 身のまわりで使ったり、遊んだりするものをくふうしてつくる。 自分の考えでつくることを主とし、必要に応じて紙の曲げ方、立て方、接合などの方法を理解してつくる。 簡単な動くものや家などをつくることができるようにする。 水の流れ風などで動く簡単なおもちゃをくふうする。 どのような材料やつくり方でよく動くかを考えてつくる。 紙を切ったり、曲げたり、はりつけるなどして簡単な家などをつくる。 紙類をおもな材料として、用具の使になれさせる。 色紙、画用紙、中厚紙などをおもな材料とし、あき箱その他、身近なものを使ってつくること。 はさみ、ものさし、のりなどを使ってつくる。

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> 自分のかいたもの作ったものに対し、考え方を友達に発表し、この経験活動から自分の表現したものを反省させる。 日常生活用品の形や色、絵画、彫刻に関心をむけるような環境構成のくふうに配慮していく。 			<p>自分の作品，級友や先輩の作品，すぐれた作品など比較鑑賞して，自分が努力すべきところをつかむようにする。</p>
共同制作	<ul style="list-style-type: none"> 共同製作はみんなで作ることの楽しさをしらせ、その活動の中の一員として自己を発揮する機会を与える。 ただ二年生では、まだ自己中心的で無理なところもある。 ただ集団成員が二人又は三人ぐらいの場合にはしばしば可能 多くの場合は各人が自分の方法でかきこれを切りぬいたものを持ちよると無難である。 発達段階の上からもむしろのぞましい。 			

小学校3学年の部

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵画	<ul style="list-style-type: none"> 従来四年に取り上げられていた「身の回りの事物をよく見てかく」内容がこの学年から加えられる。 記憶のテーマをもとにして、かくことより、むしろ学校の環境の中から興味のある場を見てかくことを教える。 材料は水彩えのぐを主とし、水彩用具の基礎的な指導をする。 版画は一、二年の継続として紙版画の技術を高める。 ◎身のまわりの事物を見てかくことができるようにする。一年、二年のそれぞれ身近の興味あるものをかくにつながるものとして指導するものとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校や家庭にいる(家畜類) 虫の世界 雨ふり 水族館 植物園 みたこと きいたこと 運動会 えんそく 水えい お話のえ 木版画(友だち)(手つだい) 	<ul style="list-style-type: none"> 絵をかく 児童が自由に題を選んでかくことを主とするが、必要に応じ題を与えてかかせる。 かく題材は児童の生活領域の広まるにつれ、その範囲を広めるとともに、特色ある場面を選んでかくようにさせる。 かき方は児童の自然発生的な方法を主とするが、描写に幾分の計画性をもたせ少しずつ先の見通しをたててかいたり、また少しずつ意識的に個性的に創造的な表現のできるようにさせる。 この学習に伴って美しいものを見る喜びを味わわせる。 描写材料は鉛筆、クレヨンパス類、不透明水彩など必要に応じていろいろなものを使わせ、しだいに各材料が使えるようにする。 <p>三年生の絵は写生してくわしくかくとか、正しくかくというような態度でなく、まだ思想画としての発想が中心である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自他の表現の違いに気づかせ、自分の感じたことや考えたことをかくことができるようにする。 記憶や想像、空想に基づいて絵の主題を決めてかく。 主題がわかるようにあらわし方を工夫してかく。 身のまわり事物を見てかくことができるようにする。 見て感じたことをかく。 かきたいものやまわりのものをよく見てかく。 絵にかくときのものとの関係を考えながらかけるようにする。 色や形の組み合わせをよく考えてかく。 かき方の順序を考えてあらわす。 水彩絵の具を主とし、必要に応じてその他の材料、用具を使ってあらわすことが出来るようにする。 簡単な版画であらわす力をのばす身近なものを使い、その形を押しつけたり、転写したりして版画にする。 紙その他の材料で版をつくり版画にする。

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
版 画		<ul style="list-style-type: none"> ◦ 題材その他については絵画に準ずる。ただし、版画には版画特有の味わいや特色のあることを理解させ、その特色をいろいろなことに生かして使うことも考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 版画をつくる ◦ いろいろな版式の種類をいくらか増して作らせる。 ◎おす版画 押捺形式（プリンティング） ◦ 自然物、器物の形おし（水性えのぐ、スタンプインキ） ◦ やさい版 ◦ 粘土、ロウセキ、ケシゴム版 ◦ ボール紙版 ◎すりこむ版画 ◦ ステンシル（カッパ版） ◦ 紙とうしや版 ◎すりとる版画 ◦ 凸版、ゴム、リノリウム版、木版、クレパス版画、瓦版、紙版 ◦ 凹版ドライポイント、セルロイド版 ◦ 平版コウド版（薬液） ◎すりだす版 拓本形式 ◦ 物体版画（実物形式）押捺、刷とり、刷り出し、吹つけ ◎デカルコマニー あわせずり、油流しなど。 ◦ 三年では版画の種類をいくらか増すというのであるから、セルロイド版、パス版画、リノリウム、ゴム版、トウシャ版、あわせずりなどを加える。 	
彫 塑	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 彫塑を作る態度として自分なりの計画で作り、まわりから作品を見て形の検討をさせながら量感をとらえさせるようにする。 ◦ 線材、面材による表現は、これまで工作的に扱った教材を彫塑的な観点に立って指導する。 ◦ 用具としてはじめて粘土べらを使うことがあげられている。 ◎「大づかみな表わし方」については感じたこと、考えたことを主として直接の手ざわりを通した量やかたまりの感じを生かして大きくつくらせ細部にこだわらずに表現させることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ すわっている人（先生） ◦ 巨人（話しに出てくる） 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土を主材料としていろいろなものを作る。 ◦ 作るものは人物、動物などの彫塑的なもの、遊ぶ道具、乗り物、器物などのような工芸的なものの中から任意に選ばせて作らせる。ただし、必要に応じ、題を与えて作らせることもある。 ◦ 作り方は、自然発生的な方法をもととし、必要に応じて材料の扱い方、表現の方法を徐々に会得させる。 ◦ 教師の側から人物のつくり方、動物のつくり方などを一方的に教えるようなことがあってはならない（比率など） ◦ ただ粘土のくっつけ方など接着点をよくへらで伸して密着させることなどは指導した方がよい ◦ 三年では彫塑的なものと工芸的なものをまだ未分化な状態で扱うことに留意しなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 大づかみなあらわし方で、身のまわりの事物をつくることができるようにする。 ◦ まわりから作品をみて、つくるものの感じがよくできるようにつくる。 ◦ 大まかな形から部分の形につくり進むなど、自分なりの計画でつくること。 ◦ 粘土その他身近な材料を使ってつくる力をのばす。 ◦ 粘土の性質を生かしてつくる。 ◦ 線材、面材などの材料の使い方をくふうしてつくる。 ◦ 粘土べら、その他身近なものを用具として使ってつくれるようにする。

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
デザイン	<ul style="list-style-type: none"> 自由な構成と目的をもったデザインの二つの内容が示され、自分の研究をまとめたり、読んだ本を知らせるなど学習と関連して友達に知らせるものを作る経験をさせる。 色や形の組み合わせについては対称やくりかえしの美しさを経験させる。 又どんな構成になっているか考えたり配色について感じたことを話させる。 理論的な取り扱いにならないように指導する。 ◎身のまわりの飾りなどを作るほか、自分で作ったものの飾りや、木の葉や魚などを主題にした自由な飾りなどが考えられる。 ◎知らせるデザインにおいては絵や文字を入れてデザインさせるが、ポスターなどの既成概念にとらわれずに表現させるものとする。 ◎対称やくりかえしは理論的な扱いにならないように注意する。 	<ul style="list-style-type: none"> カレンダー オートマチックもよう (自由に手の動くままにかく) 線、形、点 布や色紙をはる 絵の具を紙の上におとして口で吹く吹絵、絵をあわせてひらいてできる変化 形のくり返しによるもの 絵画的模様、人物や動物、木、それらの部分を歪形したり、色も好みの色をぬる 構成的、幾何学的なもの こすりだし (フロッタージュ) 	<ul style="list-style-type: none"> デザインをする いろいろな表現材料を用い、用途上の目的をもたない自由構成のものを主とし、必要に応じて工作で作るもののデザイン、環境にあるものの装飾、ポスターその他社会生活上必要なもののデザインなど用途をもったもののデザインにも及ぶ。 材料としては鉛筆、ペン、筆、写真、新聞紙、セロハン、包紙、毛糸、ひも、色紙、クレヨン、パス、水彩えのぐ、ガラス、砂、木屑、針金、わりばし。 ※表現方法 <ul style="list-style-type: none"> はりえ、デカルコマニーこすりだし、吹き絵、すみながし、パチック (はじきもよう) スクラッチ (ひっかきもよう) モザイク、染色などがある。 配色については一つの色をおき、次にどんな色をおくと色がつけあうかについて多少考えて扱うようにし、また配色の結果についてもよしあしがいくらかわかるようにする。 混色についての理解を深めさせる。 有彩色は似ている色を次々に隣りあわせに並べると一つの輪になるということを標準色紙で実験させる。 暖色、寒色、中性色に分け、色の性質を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> できあがりの効果を考えながら、飾りをつくることができるようにする。 自分で使うものの飾り、身のまわりの飾りなどをつくること。 装飾に適した配色、形の組み合わせの効果に関心をもって飾ること。 知らせたいことを、色や形であらわすことができるようにする。 学級や学校のことでは知らせたいことを、人によくわかるようにあらわすこと。 目だつ色をえらび形や材料を考えてつくること。 色や形などの違いを考えて、自由な組み合わせや組み立てができるようにする。 形の違いや配色の効果を考え、見通しをつけて自由な組み合わせや組み立てをすること。 対称やくり返しなどの感じがわかり、それを生かして表現すること。 色あいの違い、色の寒暖、中性色など色の性質に気づいて表現すること。 材料、用具は絵画や工作などで扱うものを用い必要に応じて簡単な絵や図をかき、見通しをつけて表現できるようにする。
工 作	<ul style="list-style-type: none"> これまでの内容に簡単に動くおもちゃや家などを作る。「機構の中容」が加えられた。 図をかき経験として三角定規物差しを使って「自然発生的にかく」というのが「開いた箱の形をもとに簡単な図がかけられる程度とする」に変わっている。 ◎「つくる順序を考え必要に応じて簡単な絵や図をかいてつくること」は「定規コンパス、切り出し小刀などを使ってつくること」とあいまって、開いた箱の形をもとに簡単な図がかけられる程度とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 紙で工夫したもの、まるめたり、折ったり、切ったりして好きなものを作る 針金をもとにして立つもの箱づくり (展開図利用) まわるかけ絵 人形 凧やこま うごくおもちゃ はり金をつかって 紙ひもをつかって きれいな虫 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろなものを作る 作るものは色紙、中厚紙、厚紙、その他身近にある諸材料を使って、児童の生活にとって役にたつものを作ること、それ自身に興味あるもの、もっぱら組み立てのおもしろさに重点をおくもの、基礎的な感覚の訓練に役だつものの中から自主的に選んで作らせたり、教師が題を与えて作らせたりする。 作り方はものによって違うが自然発生的な方法によって作らせる場合と、だいたいの見通しをつけ、あるいはそれを児童の程度に合った方法で図示し、作り方の順序方法を考えさせて作らせる。 各種の紙の扱い方、その他身近にある材料を扱う技術の初歩的な習得をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身のまわりで使うものをつくることができるようにする。 学習や遊びなどに役だつものを、使う目的に合うように工夫してつくること。 つくる順序を考え、必要に応じて簡単な絵や図をかいてつくること。 簡単な動くおもちゃや、家などをつくることができるようにする。 ゴムや竹などの弾性を生かして、動いたり、走ったりするおもちゃをつくること。 動くしくみを工夫してつくること。 画用紙や空箱などで、家や橋などをつくること。 紙類をおもな材料とし、用具を使用してつくる力をのばす。 色紙、中厚紙、厚紙などをおもな

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
工 作			<ul style="list-style-type: none"> 三角定木、コンパス、切り出し小刀などの使い方を練習。 必要に応じて自分の考えを図で表わしてみる経験をさせる。この図は図法的なものではなく、自然発生的なものによる。また開いた図を自然発生的にかく経験をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 材料とし、竹ひごその他身近なものを使ってつくること。 定規、コンパス、切り出し小刀などを使ってつくること。
鑑 賞	<ul style="list-style-type: none"> 「身の造形品、自然の風景、美術品の鑑賞」というように鑑賞を積極的に取り上げている。 このような鑑賞は子どもの興味にあまりならないが、望ましい環境を構成し、この内容に関心をむけるような配慮が必要である。 		<ul style="list-style-type: none"> 表現力がいちじるしく進歩する時期ではあるが、まだまだ自己中心的であり、幼稚であると見えることのほうが自然である。 自分の作品や他人の作品を批判的に見る傾向が生れてくるのでそれを指導する。 鑑賞や造形品の実用価値、美的価値についての評価の指導をする。 	<ul style="list-style-type: none"> かいたり、作ったりした作品について表現の違いを見分けることができるようにする。 作品についてその表現の意図や方法を話し合うこと。 あらかし方の違いを比較すること。 身近にある器物などの造形品を見たり、使ったりして、そのよさに気づかせたり、自然の風景や事物に関心をもちさせる。 絵画、彫刻などの作品に親しませ、必要に応じて話しあいが出来るようにする。

小学校4学年の部

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<ul style="list-style-type: none"> 従来の三つの領域である「心の中にあるものをかく」「外界を観察しながらかく」「版画をつくる」を合わせて一つの領域にまとめている。 内容的な違いはない。 絵をかかせるときの指導のポイントとして「絵の中心になるものを決めてかく」「事物の感じをしっかりとらえる」「まわりとの関係をよく見る」などを明示している。 版画では合板で版を作る。木版画で用具の使い方をおしえる。 「自他の表現の違いを知り」では、生活経験をかくことを主に、想像したことや空想したことからも具体的な画題や内容をと 	<ul style="list-style-type: none"> 心の中にあるものを絵で表現する。 放課後（2時間） 校庭（遊びを画く） 家の中（家の中の仕事を絵に画く） 夜 鳥や動物を画く（見なれている鳥や動物でも実際によく見て画くこと） 友だち クロッキー（1時間） 読書感想画 いろいろな版画 未来都市 かいじゅう 	<ul style="list-style-type: none"> 三年で「絵をかく」とあった項目は二つにわけてあるが、低学年時代の未分化だったものが分化され、主観性の強かった態度から客観的な意識が高まってくる。 ◎心の中にあるものを絵で表現する。 各自の心の中に宿った想念を思い思いにかかせることを主とする。ただし話合いで題を決めたり、題を与えてかかせることもある。 かく題材は児童の生活領域に応じて、その範囲をすだいに広めるとともに、特色ある場面を選んでかかせるようにする。 かき方は各自のかき方を発展させ、次第に計画的意識的に創造的表現ができるようにさせる。 表現の結果について反省し、作品のよしあしについてのいくらかの判断が出来るようにする。 各種の描画材料をこなす力を増し、かくものや表現の意図によってみづから適当な描画材料を選んでかけるようにさせる。 ◎外界を観察しながらそれを絵で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自他の表現の違いを知り」自分の感じたことや考えたことをしっかり、かくことができるようにする。 絵の中心になるものを決めてかくこと。 表わしたいことに基づいて、おおよその見通しを立ててかくこと。 身のまわりの事物をよく見てかくことができるようにする。 事物の感じをしっかりとらえてあらかしこと。 かくものの感じがでるように、まわりのものとの関係をよく見てかくこと。 画面のまとめ方を考えて、かくことができるようにする。 事物の感じがでるように色や形を考慮してかくこと。 見通しを立て、かき方と順序を工夫してかくこと。 水彩絵の具を主とし、必要に応じて、その他の材料用具を使ってあらかしことができるようにする。 彫ることや刷ることを理解して、版画であらかし力をのばす。 合板などの彫りやすい版材を使っ

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<p>らえさせるようにする。</p>		<ul style="list-style-type: none"> 描写に必要な形のかき方、色の扱い方児童自身の見方や表わし方などの学習をさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ◦精密な描写 ◦大づかみな描写 ◦形を主とする描写 など、いろいろな描写をも試みさせる。 この学習に伴って、自然の実しさを味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> て版をつくり、版画にすること。 材料による彫りの違いや刷りの効果に気づいて、版画であらわすこと。 彫刻刀その他の用具の使い方を理解すること。
版 画		<p>版画は上記絵画の題に準ずる。(4時間)</p>	<p>版画を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな版式の種類をいくらかずつ増して作らせる。 題材その他については「心の中にあるもの」「外界を観察しながら」に準ずる。なお版画に特有の味わいや、特色について理解させ、版画を有効に利用する道も考えさせる。 彫刻刀の安全で有効な使い方、彫刻刀その他用具の手入れや刷りの技法などについて会得させる。 <ul style="list-style-type: none"> ◦木版の刷り方 ◦粘土板 直接刷り(手のひら) ◦立体画版 1 粘土版画直接刷りと同様、丸い棒で粘土を平らにする。 2 釘、竹へら、びんのふたなどで絵をかく、石膏版の時は釘やペン先を使って作った彫刻刀で彫っていく。 3 板かガラス板の上にシッカロールをつけ、それをルーラーでよくのばし、できた版の上を何度もこがす。 4 よくならしたインキのついたローラをシッカロールのついた版の上に一回転させて、紙の上に転写する。 	
彫 塑	<ul style="list-style-type: none"> ◦内容として子どもの量感のとらえ方について「対象の量感や特徴を感じとり、全体をみながら計画的に作る」と指示している。 ◦技法的には接合の仕方やシンを使って作る。 ◦「計画を立ててつくる」とは作る順序を自分なりによく考えてつくることであり、そのためには出来あがりや予想したり、絶えず作品全体をまわりから見たり 	<ul style="list-style-type: none"> ◦粘土による動物(2時間) ◦友達 ◦針金で動きを出し石こうをつける。 ◦浮き彫り ◦魚 	<p>彫塑をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦使用する材料は、粘土のような造形材料を主とするが、彫りこんで造形する材料その他も用いる。 ◦作るものは「児童の頭にあるもの」の自由表現と、「外界にあるもの」の写生的表現との二つの方法により、任意に題を選んで作らせたり、題を与えて作らせたりする。 ◦作り方は、まる彫りを主とし、物によって浮き彫りをする。製作の技法については必要に応じて徐々に会得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦対象の量感や特徴を感じとり、大づかみな表現でつくることができるようにする。 ◦対象の量感や特徴を感じとってつくること。 ◦「全体を見ながら計画を立ててつくる」こと。 ◦粘土の接合のしかや、芯を使ってつくるなどの技法を理解してつくるができるようにする。 ◦粘土のほか、身近な材料を使ってくる力をのばす。 ◦粘土で立体をつくほか、浮き彫りなどをつくること。 ◦線材や画材など、材料の特色を生

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
彫 塑	して、あとの見通しをもたせるようにすることが必要である。			かしてつくること。 <ul style="list-style-type: none"> 粘土べら、彫刻刀など身近な用具を使ってつくれるようにする。
デ ザ イ ン	<ul style="list-style-type: none"> 内容は「装飾」「伝達」「構成」の三つに分け「経験させたい配色の効果を考えた装飾」「自分の知らせたい欲求から生まれる伝達教材」「リズムの美しさを感じとらせるような構成経験」等にまとめている。 色彩は「色相、明度、彩度」という理論的用語をさけ、子どもの経験を通して感受させる。 「材料の性質を考え」ではガラス窓の飾りなど、光の効果にも気づかせることとし、「色や形などの効果を考え」の色彩については、明るさの違いという程度にとどめ、明度差などの理論的な扱いにならないようにすることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ステンドグラス セロハンの透過光を使う。 ガラスにワセリンをぬる ポスター（学内伝達用）（3時間） ごばんめもよう（3時間） 方眼紙の大きなものを使って、きれいなごばん目模様をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎デザインをする 用途をもたない自由構成を主とし、「工作で作るもの」のデザイン、「学校行事や社会的な行事」に関連あるもので、児童に可能なもののデザイン「身近にあるものの装飾」およびこれらに発展する性質をもつものなど用途をもったもののデザインをさせる。 感覚を通してリズム、対称、つりあい、くりかえし、変化と統一などの美しさを体得し、作品のよしあしが、だんだんわかるようにさせる。 デザインは「平面的」なものばかりでなく、できるだけ「立体的」なものにも及ぶ。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>*構成の五原則の説明</p> <p>Symmetry</p> <p>Balance</p> <p>Contrast</p> <p>Rhythm < repeat gradation</p> <p>Proportion</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 配色については、いづらか計画的にできるようにし、自主的に主調色を選べるようにする。 色に「色あい」「明るさ」「あざやかさ」の違いがあることに注意させ、また「無彩色」と「有彩色」のあることを確認させる。また、これらの色の性質や違いをうまく使うことが配色上にたいせつであることを理解させる。 色に伴う「感情」「色相距離」と配色との関係などについて初歩的な理解をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 材料の性質を考え、目的に応じた工夫をしながら飾りをつくることのできるようにする。 自分で使用するものの飾り、身のまわりの飾りなど、目的を考えてつくること。 配色の効果や、計画的な形の組み合わせを考えて飾ること。 人によくわかるように、知らせたいことを色や形であらわすことができるようにする。 学級や学校で必要な知らせるものを工夫してつくること。 色や形に伴う感情、材質や表面のはだざわりの効果を考えて、自由な組み合わせや組み立てができるようにする。 効果を予想し見通しをたてて、自由な組み合わせや組み立てをする。 リズムのある美しさなどを感じとって表現に生かすこと。 色の明暗や、強弱、色の感情などに関心をもって、計画的に配色すること。 材料、用具は絵画や工作などで扱うものを用い必要に応じて、絵や図で表わし、順序や方法を考えて表現できるようにする。
工 作	<ul style="list-style-type: none"> 「役に立つもの」「動くものや建物を作る」を学習として明示し、材料・用具では紙類（厚紙）を主とし、木ぎれなど身近の材料を使い、新しくのこぎり、かなづちの経験をさせるとしている。 従来の「基礎的な構成練習がデザイン、彫塑の領域になり、材料の「竹」がなくなり、一貫した作業過程の経験 	<p>役に立つ工作</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)竹でおもちゃを作る 2)粘土で器物をつくる 3)車やクランクを応用した遊び道具を作る 4)編物や組物で手さげなどを作る。 <ul style="list-style-type: none"> 車のあるおもちゃ つるお魚（モビ 	<p>いろいろなものを作る</p> <ul style="list-style-type: none"> 作るものは粘土、各種の紙類、竹、木その他身近にある諸材料を使って児童の生活に役にたつもの、感覚訓練、基礎的な構成訓練などを旨とするもの、作ることにそれ自身に興味あるものの中から、自主的に選んで作らせたり、教師が題を与えて作らせたりする。 デザイン学習と関連して作るもの計画、設計、工作の順序方法、塗装仕上げまでの「一貫した作業過程」をいくつかのものについて経験させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身のまわりで使うものを考え、計画的につくることのできるようにする。 入れ物その他学習や遊びなどに使うものをつくること。 目的によく合う形や、大きさなどを考え、必要に応じて絵や図をかいてつくること。 動くしくみを工夫しておもちゃをつくったり、形を考えて家などをつくったりすることができるようにする。 ゴムや竹などの弾性、つり合いなどを生かして、動いたり、走った

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
工 作	<p>として、目的にあった形や、大きさを図で表わすと指示している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しく「機構的な玩具」が加わり内容としてはクラフト的なものからインダストリアル的なものへ変わった。 工作では児童の造形活動における積極性を重んじ、「目的によく合う形や大きさ」での図示や「のこぎり、かなづち」での用具などの経験とともに、「計画性や技能を高めること」が必要である。 	<p>ール)</p> <ul style="list-style-type: none"> 粘土のうつわ ギニョール 塔・建物 花・動物人形 	<ul style="list-style-type: none"> 各種の紙の扱い方、粘土による成形、竹、木の初歩的な扱い方、その他必要な初歩的な技術を習得させる。 三角定木、コンパス、切出し小刀、のこぎり、なた、きり、その他必要な用具の使い方および手入れの練習をさせる。 簡単なものの開いた図がかけるようにし、また自分の考えを図で表わす経験をさせる。その図は見取図的なもの、平面図的なもの、立面図的なものなどを主とし、図では表わしきれないところは説明の文で表わすなど児童の自然的な発達に応じた方法をとらせる。 <p>1 役に立つ工作 2 感覚訓練、基礎的な構成練習を旨とするもの紙彫刻や、紙構成 細木や竹ひご、針金、線材 3 作るそれ自身に興味あるもの、 空箱や空かんを使って立体的に図案を工夫させ回すことによって変わる色や形のとりあわせを工夫させる。そのほか、彫刻あそび、のりものや船をつくる空かんや板金をつかって好きなものをつくる雑材工作などがある。</p>	<p>りするおもちゃをつくること。</p> <ul style="list-style-type: none"> よく走ったり動いたりするように工夫し、目的に合った形や組み立てを考えてつくること。 細木や厚紙などの組み合わせや組み立てを考えて、家や橋などをつくること。 一紙類をおもな材料とし、用具を使用してつくる力をのばす。 厚紙などをおもな材料とし、木片その他身近なものを使ってつくること。 のこぎり、かなづちなどのほか、接着、緊結のための材料用具を使ってつくること。
鑑 賞	<ul style="list-style-type: none"> 表現活動に付帯して行なわれていた鑑賞活動が一つの領域となる。 学習としては子供の作品を通して、作品のよさ、表現の仕方のちがいを見分ける話し合いをし、学習内容にあった大人の作品を学習の発展になるようにして与えていく。 「かいたり、つくったりした作品」の児童の作品の鑑賞については作者の意図が作品に表現されているかどうかを特に「感情を通して、はあくさせることが必要」である。 		<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞の指導は、表現活動に付帯して行うようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> かいたりつくったりした作品について、そのよさや表現のしかたの違いを見分けることができるようにする。 作品について、その表現の意図や方法を話しあうこと。 表現のしかたの違いについて比較すること。 身近にある器物などの造形品を見たり、使ったりして、そのよさをわからせたり、自然の風景や事物に関心をもたせたりする。 絵画や彫刻、工芸などの作品に親しませ、必要に応じて、作品の特色について話し合いが出来るようにする。

小学校 5 学年の部

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<ul style="list-style-type: none"> 表現内容は「心象にもとづくもの」「観察にもとづくもの」の二つに分け、子供の個性を生かして、見方、表わし方が一方に片寄らない指導をするように指示している。 版画は絵画に統合し、材料方法がちがった絵画として取り扱うと指示している。 版形式は木版で版効果を考え、作るように学習展開していく。 絵画においては児童の知的な発達に合わせて構想をねり、計画を立てて表現する能力を育てるとともに、墨絵や絵巻物など表現の形式の異なるものを経験させて、表現の意欲や技能を高めることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 春を探してかく 学校の生活 友達 先生 仕事をする人 花をかく 木をかく 色々の木を観察してかく 読書感想画 冬の風景 はん画 自分の学級 お母さん (版画) 	<ul style="list-style-type: none"> 心の中にあるものを絵で表現する 各自の心の中に宿った想念を思い思いにかかせること 題材を選ぶのに表現の結果を予想して、特色ある場面を選んでかくようにさせる かき方は、各自のかき方をさらに発展させることを根底とし、必要に応じて技法的なものを加える。また心の中に宿った構想をスケッチやその他の方法を用い、いろいろに発展させ、まとまりのある表現をさせる。 外界を観察しながら、それを絵で表現する 実物を見てかく場合も、それぞれ自分の感じ方見方のあることを理解し、それに応じた表現の方法を工夫し、個性的、創造的な表現をするように会得させる。 描写の目的、描写練習の必要に応じて、細密な描写、大づかみな描写、単純化した描写、あるいは素描、彩画、また実物のある特徴に重点をおいた描写をさせる。 ◎「外界を観察しながら、それを絵で表現する」で、内容に示す各事項はそれぞれ孤立することなく互いに関連して学習させ、また適宜分合して、学習内容を組織して指導すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 感じたことや考えたことをもとに、構想を立ててあらわすことができるようにする。 自分の構想を明確にしてかくこと。 構想が表現に生かされるように効果を考えてかくこと。 身のまわりの事物をよく見て、工夫してかくことが出来るようにする。 見方をかえることによって、表わし方も工夫出来ることを理解してかくこと。 形の大小、色の明暗など、あらわし方を工夫してかくこと。 画面の構成を考え、計画を立ててかけるようにする。 ものの色の違いや形の変化、遠い近いなどの感じを生かしてかくこと。 ものの感じや画面のまとまりを考えてかくこと。 あらわし方に応じて、適切な材料や用具を選んで表現できるようにする。 木版を主とし、計画を立て、その順序を考えて、版画であらわす力をのばす。 感じたことや考えたことを計画を立て、その順序を考えて版画で表わすこと。 版画の味わいがわかり、効果を考えて版画にすること。 彫刻刀その他の用具の使い方を経験し、理解すること。
版 画		<p>生活を題材にする 木版画</p>	<ul style="list-style-type: none"> 版画を作る 版画の形式、味わい、技法などを中心にしたものからの理解を深めさせること。 木版画を主とし必要に応じてその他の版画を試みさせる。 わが国の伝統的な版画や近代版画の特色についていくらか理解させる。 ◎機会をとらえて「共同製作をする」こと。 	

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
デザイン	<p>しき、方向、動きを感じる構成」などの経験をさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 色彩の内容としては、理論的にかたよらない取り扱いにならないようにと注意している。 「主調色を選んで統一のある配色をしたい」の色彩では、目だつ配色や目だたない配色の違いを知って表現させることとし、明視度や対比など理論にかたよる扱いにならないようにすることが必要である。 		<p>強くだんだん小さく、などの変化の美しさなどについて理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 色あい、色の明るさ、色のあざやかさの取扱方と配色の効果との関係についての理解を増す。 美しさの秩序と思われる事例について学習させることが必要である。 <p>◎学習によって得た力をなるべく生活に適用させる機会を与える。たとえば「学校内の整備」「学校や家庭の備品の簡単な修理」「学芸会、展覧会などの会場の整備、装飾」など。</p>	<p>わすことが出来るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学級や学校で必要な知らせるものデザインをすること。 知らせる目的に合わせて、色や形、材質などの効果を考えてデザインすること。 色や形などの平面構成や立体構成をする力をのばす。 ある条件や制約のなかで、用途上の目的をもたない自由な構成を計画的に行なうこと。 つりあいのある美しさ、方向や動きなどの感じを生かして表現すること。 「主調色を選んで統一のある配色」をしたり、明るさの差による色の明視などに注意を向け、目だつ配色や目だたない配色をしたりすること。 材料、用具は絵画や工作などで扱うものを用い、必要に応じて図などをかいて目的に合ったデザインが出来るようにする。
工作	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容は従来と内容的には変わらない 材料は針金や木などの線材、面材で竹、板金がなくなる。 従来4年に示された「一貫した作業経験」が「内容の取り扱い注意事項」としてこの学年に出てくる。 針金を使った工作等材料になれさせるようになった。 工作においては児童自身の考えをたいせつにするとともに、つくるものの計画、表示、つくる順序など、完成までの一貫した過程をふくんでつくれるようにすることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> (木材)をつかって 本立・筆立・箱状さし・船など (板金)をつかって 動物・のりもの顔・家 (針金)をつかって 動物・のりもの(動くもの)・人の形 じよう差し (木取り、彫り、塗装) かざりさじ (板を切る) 走る車 	<ul style="list-style-type: none"> 役にたつものを作ったり、構成の練習をしたりする。 作るものは各種の紙、粘土、竹、木、針金、板金、その他周辺にある材料を使って生活上の役にたつものを作ったり、構成上興味あるものを作らせる。役にたつものを作る場合は「美と用との関連」について理解させる。 作るものを頭に浮べて構想し、図をかいてみたり、参考品各種、資料を見たりして、構想を発展させ、だんだん精密な設計として、構成の出来るような図をかき、順序、方法を検討して製作し、塗装仕上げの効果を考えて作る経験をさせる。その間にいろいろな作り方を体得させる。 板金や針金の接続箇所を固めるものとして「半田づけの方法を教えること。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 機構的な玩具、模型を作る。 ゴム、ばねその他の動力を利用した玩具、模型の類などとなっていて、とくに「科学的な理解」を土台として発展した製作をする。 材料としては、それぞれ効果的な材料が選ばれるようになっていく。 船でいえばスクリュー、自動車で 	<ul style="list-style-type: none"> 役に立つものの目的を考えて、計画的につくることが出来るようにする。 目的に合わせて美しく機能的なものを計画を立ててつくること。 針金を切ったり曲げたり、木を切ったり接合したりしてつくること。 粘土で器物などを成形し、必要に応じて、焼成のしかたを理解したり、つくったりすること。 つくるものの形や大きさの図示は説明的な絵や図を主とし、必要に応じて、図の見方や画き方を理解してつくること。 動力の使い方や伝わり方を工夫して動くものをつくったり、形や組み立てを考えて、建物などをつくったりすることが出来るようにする。 ゴム、ばねなどの動力をもとに、力の伝わり方を工夫して「動くものをつくる」こと。 技法や図示は「針金を切ったり、曲げたり木を切ったり、接合したり」「つくるものの形や大きさの図示」に準じ動力の伝わり方の図示などをしてつくること。 細木や薄板などの組み合わせや組み立てを工夫して、橋や塔などを作る。

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
工 作			<p>例えば車輪、それぞれの動力となるものはゴム、ばねのほかに電池を利用した電動機まで利用することは、大いに扱ってよいものと考ええる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 針金や木などの線材、面材を主とし、材料や用具を使用してつくる力をのばす。 線材、面材、など身近な材料を使って作ること。 ペンチや糸のこぎりなどの工具を使って作ること。 材料の種類や性質に合わせて、接着や緊結をしたり、工具を使用したりする方法を理解してつくること。
鑑 賞	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞の内容としては「自分で作った作品」の他に「身近な造形品」「自然の風物」「代表的な美術作品」等の四つの内容を示す。 五年では鑑賞の内容が非常に広がるので適当な資料を蒐集し、鑑賞資料の充実をはかる必要がある。 代表的な美術作品とはたとえば、墨絵、絵巻物、版画、彫刻、工芸、建築などとし、絵画の複製や写真などによるときは資料を吟味して選んで行なうことが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ゴッホ レオナルド・ダ・ヴィンチ ピカソ などの絵を鑑賞しながら次第に西洋美術に関心を高めていく。 北斎などの版画や、宗達などのふすま絵をみせながら西洋と日本の絵の違いなどを教えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 作品を鑑賞する 作品を鑑賞する力を見る機会を多く与えることだけでは駄目である。 自分でもそれに類する経験をした方が、よりはっきり確実に鑑賞の力がつく。 表現と鑑賞は非常に密接な関係にある。 鑑賞の内容はなるべく子どもにわかりやすいものを選ぶようにしたい。 絵画、彫刻、建築、工芸品などから「一般に有名な作品」「常識として知っていたほうが好ましい」というものを鑑賞させる。 必要な年代、作者、その作品が生れるようになった環境について関係事項を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> かいたり作ったりした作品などについて、色や形の構成の違いがわかるようにする 表現の意図や構成のしかたについて話し合うこと。 色や形の構成のよさや感じの違いについて比較して見ること。 身近にある造形品を見たり使用したりして、そのよさを理解することが出来るようにするとともに、自然の風物についてもその美しさがわかるようにする。 身近な造形品について、その目的や材質を確かめてみるとともに、色や形、構造についても比較すること。 自然の風物をよく見て、その変化のある美しさに気づくこと。 代表的な美術作品を鑑賞させて、そのよさを味う力や文化財を尊重する態度を養う。 児童に親しみやすい絵画、彫刻、工芸、建築などの代表的な作品を見ること。 作品の内容や表現のしかたについて、比較したり話し合ったりすること。

小学校 6 学年の部

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
絵 画	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容としては「心象にもとづく表現」「観察にもとづく表現」で表現形式の異なる版画の学習をし、木版画の順序に従い、作る版画を通して計画的な表現を経験させる。 空間の把握としてのものの色の違い、形の変化、遠い近いの関係をとらえ、ものの質や量感に気づかせて表わし方を工夫させる。 用具、材料は表わし方に応じて選んで使用する。 絵画においては、五年に準じてさらに構想力を高めるとともに、内容の「画面の構成を考え」の項で示す画面構成などを身につけさせることとし、また「木版を主とし、計画を立て」の項で版画においては下絵、彫り、刷り、などの表現過程をふんでつくれるようにするとともにその間の計画力や技能を高めることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 緑の木をかく 学校、校庭のスケッチ 休み時間の絵 自分達の生活 友達をかく 工事をする人達 工事現場 秋の校庭 冬の校庭 動物、植物など身近なものをよく観察して出来るだけくわしくかく 空想都市 共同製作 <ul style="list-style-type: none"> 版画 (働く人) 絵 (学校生活) 	<ul style="list-style-type: none"> 心の中にあるものを絵で表現する。 各自の心の中に宿った想念を自由にかかせる。 主題の選定は児童が「自由に自主的に決める場合」と教師の方で「主題を示して学習させる」方法がある。 表現の結果を予想して「特色ある場面」を選んでかくようにさせる。 「特色ある場面」とは、特定の場所、ことではなく、絵として特色ある場面、つまり絵画的効果のあるという意味と、「子どもの個性的な働きとのつながり」をもつという二つの解釈がある。 かき方は各自のかき方をさらに発展させることを根底とし、必要に応じて技術的なものを加える。 心の中に宿った構想をスケッチやその他の方法によりいろいろ発展させ、まとまりのある表現をさせる。 各種の描画材料を使いこなす力をいっそう増し、かくものや表現の意図によって、みずから適当な材料を選んでかける力をいっそう増すようにさせる。 外界を観察しながらそれを絵で表現する。 描写方法については、児童の必要感に応じて授け、児童各自の描写方法を形成させる。 描写の目的、描画練習の必要に応じて、細密な描写、大づかみな描写、単純化した描写、あるいは素描、彩画また実物のある特徴に重点をおいた描写などを適宜に組み合わせ学習し、身についた描写力をつけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 感じたことや考えたことをもとに、構想を立ててあらわす力をのばす。 自分の構想を明確に表現できるようにかくこと。 構想をもとにして効果を考えて見通しを立ててかくこと。 身のまわりの事物をよく見て、工夫してかく力をのばす。 見方や感じ方の違いによって、いろいろな表わし方があることを理解してかくこと。 「精密な描写」、「大づかみな描写」などあらわし方を工夫してかくこと。 「画面の構成を考え、計画を立ててかく力をのばす」・ものの「色の違い」や「形の変化」、「遠い近い」などの関係をとらえてかくこと。 あらわし方に応じて、適切な材料や用具を選んで表現する力をのばす。 「木版を主とし、計画を立て、その順序に従って、版画であらわす力をのばす」 感じたことや考えたことをもとに、計画を立て順序に従って版をつくり、版画であらわすこと。 版画の味わいや特色を理解し、効果的にあらわすこと。 版画の材料や用具を、順序よく使ってあらわすこと。
版 画			<ul style="list-style-type: none"> 版画をつくる 木版画を主として、必要に応じてその他の版画も試みさせる。 題材その他については「心の中にあるものを絵で表現する」「外界を観察しながらそれを絵で表現する」に準ずる。 版画特有の味わいのあること、特色について理解させる。 版画を有効に利用することを教える。 彫刻刀の安全で有効な使い方、用 	

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
版 画			<ul style="list-style-type: none"> 具の手入れなどの技術を会得し、いろいろな版式や、すりの技法について理解させる。 わが国の伝統的な版画や近代版画の特色についていくらか理解させる。 	
彫 塑	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容としては、材料を生かし子ども達が見たり、想像したり、感じたこと、考えたものを空間に意識しつつ立体的なものに表現するように指示し、全体と部分との調和や表面のはだざわりを考えて作らせていく。 小学校のまとめとして、これまでの経験をまとめながら材料のえらび方、計画的な表わし方、表わし方の工夫を指示している。 「表現の対象や意図に応じて彫塑的なあらわし方を工夫し」の項では、児童がものを見たり想像したりして、感じたことや考えたことを粘土などの材料で空間を意識しつつ立体的なものに表現すること。 	<ul style="list-style-type: none"> うきぼり（動物、植物）別の紙にデッサンをさせ、それを粘土板にうつし高低を考えさせながらレリーフさせる 友達の立像 セメントを使った彫塑 1)使い方 2)順序を教える 3)ものとりえ方 	<ul style="list-style-type: none"> 彫塑をつくる 「心の中の想念を彫塑で表現する」 「外界を観察しながら彫塑で表現する」が内容となっている。 立体として「動き」「形態」「量感」など構成の要素を指導する。 構成として「材料の性質」の処理方法を教える。 作る順序と計画性をもって作業をさせること。 作るものにより、また児童の必要に応じて「製作技法」について会得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 材料の性質や特色を生かして、量感のある表現ができるようにする。 量感や動きなど、対象の感じをとらえて個性的に表現すること。 全体と部分の調和や、表面のはだざわりを考えてつくること。 表現の対象や意図に応じて彫塑的なあらわし方を工夫してつくる力をのばす。 材料使用の効果を考え、表現の意図に合わせて、適切な材料を選んでつくる力をのばす。 つくる意図に応じて材料の特色や使用の効果を考慮して適切な材料を選んでつくること。 線材、面材、塊材などを使って変化やまとまりのある構成を考えてつくること。 彫塑の用具を表現の意図に応じて選択し、計画的に使用し、つくる力をのばす。
デ ザ イ ン	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動は 「装飾する目的や用途に応じて効果を考慮してデザインをする」 「知らせる目的をもって人によく理解できるように工夫して作るデザイン」 「色や形などの平面構成、立体構成をする力をのばす」の3つに分けている。 色彩内容については色の機能的な使用を理解させる。 「構成の美しさ」については調和、統一の変化の美しさを感じると示しているので、学習のさい、ここに指導のポイントをおくこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 本立て（機能を理解させる） 自然物を使った構成（平面構成） 花、たまご モザイク 色紙 玉子のから レシート 型おし、いも版、ゴム版（形、色をかえておす） ポスター アイデア・スケッチ 読みやすい文字 両方を合わせて構成 配色を考える 	<ul style="list-style-type: none"> デザインをする。 用途をもったもののデザインを主として扱い、五年に比べて、扱う範囲を広げるようにする。 生活領域に応じて扱うようにする。 デザインの条件というものがどのような意味のところから生まれているかを見きわめるようにする。 初めに配色の意図を決め、その意図に従って配色が出来るようにし、配色のよしあしについて判断ができる力を増す。 色あい、色の明るさ、色のあざやかさの取り扱い方と配色の効果との関係を教えること。 いろいろな色彩現象についての初歩的な理解をさせる。たとえば色の対比現象、とびだして見える色、ひっこんで見える色、重く見える色、軽く見える色など初歩的な理解をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 材料の特色や美的効果を考慮して、目的や用途に応じた飾るデザインができるようにする。 飾るものや、場所に 応じて工夫し、効果を考慮してデザインすること。 目的に応じた材料を選び、その特色を生かしてデザインすること。 知らせる目的が人によく理解できるように、色や形の構成を工夫してデザインする力をのばす。 学校や地域社会に必要な知らせるもののデザインをすること。 色や形、材質などの効果を考慮して構成し、材料を選んでデザインすること。 色や形などの平面構成や立体構成をする力をのばす。 ある条件や制約のなかで用途上の目的をもたない自由な構成を計画をもって行なうこと。 調和や統一と変化のある美しさな

	指導要領のおもな変更	課 題	移 行 前	移 行 後
デザイン	<ul style="list-style-type: none"> 「標色などの色や形の機能的な使用を理解したり」の項では、道路標識その他の標識、図書や道具の色による分類などの身近な例で、配色や形の構成の目的を考え、色や形の性質や感じを生かしたはたらきのある表現であることを感覚的に理解させるとともに、色彩に対する関心を生活に生かす態度を養うことが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 色の働き シンボル・デザイン 	<ul style="list-style-type: none"> 「色の機能的な使用についての初歩的な理解をさせる。たとえば、各種の標識、室内の色のいかんによって、気持や仕事の能率のうに違いが出来ること」などの面で児童の興味とデザインへの関心を色彩の面から考えさせる。 対称の美しさ、つりあいの美しさ、リズムの美しさ、大小、強弱その他の対称の美しさ、だんだん小さく、だんだん強くなどの変化の美しさなどについて理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> どを感じとって表現すること。 「標識などの色や形の機能的な使用を理解したり、色の性質の違いを生かして調和のとれた配色をしたりすること」 材料、用具は絵画や工作などで扱うものを用い、美しく合理的にデザインし、その効果の判断が出来るようにする。
工 作	<ul style="list-style-type: none"> 「役に立つものを作る」「機構的玩具」「模型を作る」の領域を合わせて工作としている。 「役に立つものを作る」の内容の中で、粘土で計画的に器物などを成形し、必要に応じて焼成の仕方を理解させて作る、と指示している。従来この学年ではなかった内容である。 作る態度としては、着想が完成まで一貫した過程を経て行なうようにと指示している。 工作においては、つくるものを考え、参考になる作品や資料を調べて、着想を発展させ、表示し、材料を準備し、つくる順序を決め、機能や構造を検討しながらつくるというように、着想から完成までの一貫した過程をふんで行うことが出来るようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 本立て (図にしたがった木取り) おりきを切ったり、曲げたりして空想の動物、人物を作る 動くおもちゃ (カム機構を理解させる) 壁かざり (鳥) (板材を使用する) 塔 } 線材 橋 } 無駄のない材料の組合せ ボール紙を折ったり切ったりして美しい立体を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎役にたつものを作ったり、構成の練習をしたりする。 作るものは、各種の紙、粘土、竹、木、針金、板金、その他の身近にある材料を使って、生活上の役にたつものを作ったり、構成上興味あるものを作らせる。 役にたつものを作らせる場合は美と用との関連について理解させる。 作るものの計画、設計、工作の順序方法、塗装仕上げまでの一貫した作業過程をいくつかのものについて経験させる。 各種の紙の扱い方、粘土による成形、竹、木の初歩的な扱い方、その他必要な初歩的な技術を習得させる。 三角定木、コンパス、切出し小刀、のこぎり、なた、きり、その他必要な用具の使い方および手入れの練習をさせる。 意図的な図示法をどんどん発展させる。また前から見た図上から見た図、横から見た図などについて理解を深めさせる。 ◎機構的な玩具、模型の類を作る。 作るものは滑車、ベルト機構、歯車機構、その他簡単な機構やゴム、ばね、その他の動力を利用した玩具、模型の類などの中から適当なものを選んで作らせる。 いろいろなものを作って、その合理的な意義や、原理的な事項を抽象する方向で学習を進めること。 工作においては原理的なものを抽象して理解するというのではなく、すでにいろいろの科学的理解をわきまえ、それらを作るもの 	<ul style="list-style-type: none"> 役にたつものの目的や美しさを考えて、計画的につくることが出来るようにする。 役にたつものの目的や機能を考え、美しく合理的な形を工夫し、計画を立ててつくること。 線材や面材を切ったり、曲げたり接合したりしてつくること。 粘土で計画的に器物などを成形し、必要に応じて焼成のしかたを理解したり、つくったりすること。 「つくるものの図示は、説明的な絵や図」を主とし、必要に応じて、図の見方やかき方を理解してつくること。 動力の使い方や機構を工夫して動くものを作ったり、合理的な形や構造を考えて、建物などをつくったりすることが出来るようにする。 滑車や輪軸など動きを伝える機構を考えて動くものをつくること。 技法や図示は「線材や面材を切ったり曲げたり」、「図示は説明的な絵や図を主とし、に準じ、動力の伝わる機構の図示などをしてつくること。 細木や薄板などの組み合わせや組み立てを工夫して、計画的に橋や塔などをつくること。 針金や木などの線材、面材を主とし、材料や用具を有効に使用してつくる力をのばす。 目的に応じて、線材や面材の特色を効果的に生かしてつくること。 木や金属の材料に用いる工具の技法を理解してつくること。 接着や緊結の方法を合理的に考え、じよぶなものをつくること。

図画工作科指導要領についての考察

	指導要領のおもな変更	鑑 題	移 行 前	移 行 後
工 作			はたらきや、その効果を考へて、それぞれの一つ一つとしての理解を総合したり、選んで組み合わせたりしていくこと。	
鑑 賞	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞の内容としては、5年次と同様である。代表的な美術品については、たとえば絵画では写実的なもの、構想的なもの、幻想的なものと比較しながら「表現形式」に関心をもたせる。 「代表的な美術品を鑑賞させ」の項では、たとえば絵画においては写実的なもの、構想的なもの、幻想的なものなどというように、作品の傾向を考へて示したりすることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の版画の鑑賞 西洋美術史の移り変り 	<ul style="list-style-type: none"> 作品を鑑賞する、 見るだけでなく自分でも、それに類する経験を通した方がよりはっきり確実になり、鑑賞の力として身につく、ただ見せるだけで鑑賞の学習が終ってはいらない。 造形における活動の中でたえず表現にむすびついた鑑賞をすること。 鑑賞については次の二つの考え方があつた。 一つのまとまった時間で計画して指導する方法と。 表現学習の過程において、それぞれ必要な時に取りあげる方法。 鑑賞作品はなるべく子供にわかりやすいものにする。 絵画、彫刻、建築、工芸などは幅広くとりあげる。 必要な年代、作者、その作品が生れるようになった環境など、関係する事項を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> かいたりつくったりした作品などについて、色や形の構成の美しさがわかるようにする。 表現の意図や構成のしかたについて話し合うこと。 色や形の構成の特色やよさについて比較して見ること。 身近にある造形品を見たり使用したりして、そのよさを理解することができるようになるとともに、自然の風物についてもその美しさがわかるようにする。 身近な造形品について、その目的や材質を確かめてみるとともに、色や形、構造についても比較すること。 自然の風物やその変化の美しさがわかること。 「代表的な美術作品を鑑賞させて、そのよさを味わう力や文化財を尊重する態度を養う」 絵画、彫刻、工芸、建築などの代表的な作品を見ること。 作品の内容や表現のしかたについて、比較したり、話しあつたりすること。

IV 旧指導要領にもとづく現行の図工科授業の実態と問題点

現場の図工科授業の実態はどうなつていようであろうか、指導要領に示しているパーセンテージと実際に教室で行われている授業時間を表に比較してみると次のようである。(表1)

A. とBを比較してみると数字のうえからかなりの片寄りのあるのがわかる。絵画、彫塑を加えた数値は学年でそれぞれ違ひ1学年53%、2学年49%、3学年57%、4学年50%、5学年43%、6学年48%であるが指導要領では各学次40%になっている。

第1図の絵画、彫塑のグラフで3学年から5学年にかけて線が下向線をたどつていようのは児童生徒が心象表現の限界にきたことを示してあり、逆に工作、デザインなどの機能表現的なものが上昇していようのがわかり、この種の指導を行うべきであることがわかる。

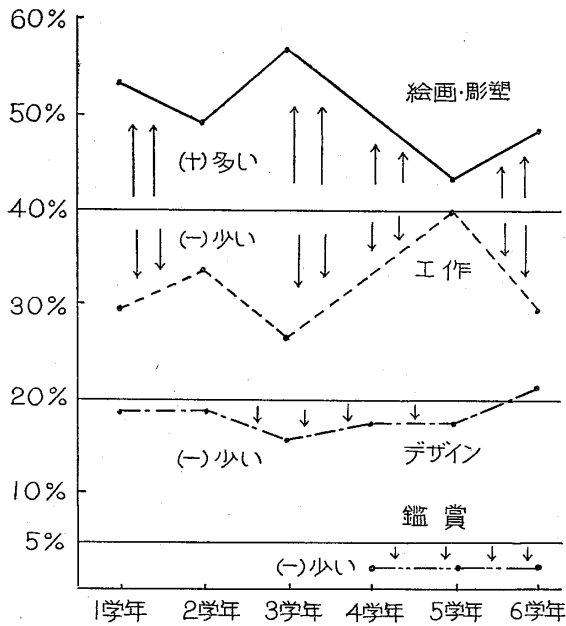
(表1) A B

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	各年次
絵画	29時間 47%	27時間 40%	37時間 49%	37時間 42%	34時間 39%	33時間 37%	40%
彫塑	4時間 6% 53%	6時間 9% 49%	6時間 8% 57%	7時間 8% 50%	4時間 4% 43%	10時間 11% 48%	
デザイン	11時間 18%	12時間 18%	12時間 16%	15時間 17%	15時間 17%	19時間 21%	
工作	18時間 29%	22時間 33%	21時間 27%	29時間 33%	35時間 40%	27時間 29%	40%
鑑賞	0	0	0	0	2時間	2時間	5%

A. 実際教室で行われている各領域ごとのパーセントと時間数

B. 指導要領の示しているパーセント

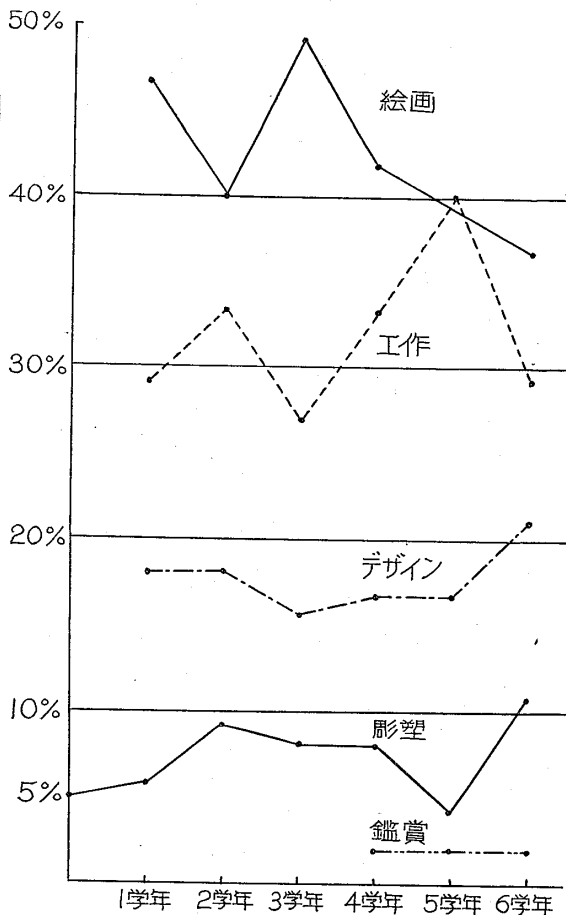
第1図



第1図説明

絵画・彫塑で3学年・4学年・5学年における下向線のグラフは画くという心象表現が低下してゆくことを示し、反対に工作のグラフが上昇しているのは絶対数とし

第2図



ては指導要領の要求する40%に達しないが、3学年ぐらゐから次第に機能面が延びていくのがわかる。

故にこのグラフで表現法方が心象的なものから、機能的なものに代る段階がうかがわれる。

第2図説明

第1図と同じものであるが、心象表現における絵画と彫塑を分離してグラフに示したものである。一般的に見て絵画に使用する時間の絶対値は多いが、高学年になるほど画けなくなることがわかる。

工作に使用する時間は絵画に比較して少ないのが目だつ、これは技術がともなうことと、限られた時間内に仕上げにくいなどの理由であろう。

デザインは平均している。

彫塑は10%を切っており教え方の難しさが表われている。

鑑賞は極めて少い。ただし4年までは主として各領域に付帯されて行なわれている。

第1図で示しているとおりに、絵画・彫塑は40%を大きく上まわり、デザイン、工作、鑑賞は逆にそれぞれのパーセントを下まわっていることがわかる。特に工作は40%を割り平均して30%ぐらゐしか取りあげられていない。

筆者の知人である小学校の先生方は、この表を見られてこの表の数字は理想ではあるが、実際には実施出来るものではないと否定している。では何故指導要領と現場の授業がこのような違うのであろうか、原因になりそうなものを考えてみた。

- 1) 学校として、又教室としての条件整備が充分でない。
- 2) デザインや工作などで、特殊な材料を使うと設備や材料代で父兄の負担が重くなる。
- 3) 彫塑、デザイン、工作などでは教師自身の取り組む意欲が非常に問題になってくる。
- 4) それらの結果が絵をかかせておけばよいという従来の安易な図画のかかせ方につながっている
- 5) 彫塑、デザイン、工作の授業における教師自身の指導技術の不足がある

第2図に示したように4学年になると、それまでの心象表現的なものから、機能表現的なものを好むようになる。それまでは自分自身上手だと思っていた絵が色々と気になりだし画けなくなってくる。

そのような時期にこそ指導が必要になるのである。教師は適切な方法で機能表現的なデザインや工作を重点的

図画工作科指導要領についての考察

にとりあげ授業すべきであろう。

又後でも述べるが他教科との有機的な結びつきを考え工夫された授業を行うことも考えられる。そこで精密画を一例にあげて説明してみよう。

周知のとおり精密画は絵ではなく機能的な表現の一つである、言い換えればものを細部にわたり観察し、自然を克明にとらえていく仕事であるといえよう。

すなわち、ものを美しく画くのではなく、自然のありのままを忠実に画きとめるのが目的である。

レオナルドやレンブラントは絵のほかに解剖図としての数多くの文献を残している。日本でも牧野富太郎博士の植物図鑑などはその代表的なものであろう。

精密画は絵画的要素より、むしろ自然科学的要素をもっており、工学的要素も含まれているといえよう。そのような理由で精密画を画かせる場合はただ美しく画かせるより、むしろ正しく画かせるべきであり、導入時に歴史的なうらづけや自然科学との関係を詳しく説明し、どのような目的をもって画くかという動機づけを明確にしておくことと授業の効果があがるのではなかろうか。

V 上記諸問題点の考察と打開の方法

前項で述べたように一般的に図画工作科の授業は現状では非常に変則になっているといえよう。ではなぜ現場の授業と、指導要領の目標がくい違っているのであろうか、このことについて考えてみると大変重要なことが明らかになってくる。

まず教師の養成過程に問題がある。

- 1) 大学の専科で図画工作をとる学生は別として、副科で図画工作をとる学生は養成過程での教材研究を演習でやるだけで終わっている
- 2) 1単位15週(演習の場合)だから3時間×15週つまり45時間やるだけである。それだけの履修で絵画彫塑、デザイン、工作、鑑賞の多岐にわたる領域をこなすことはとても無理なことであると思う。
- 3) 特に彫塑、デザイン、工作では相当の基礎知識と準備が必要であるのに、不十分な時間と実習で終わってしまうことは教師としての立場から疑問が残るのではなかろうか。

次に現場にたつ指導者の問題点を考えてみよう。

- 1) 図画工作の時間を息抜きと考えている教師は積極的に専科制にふみきるべきである。
- 2) 専科制を設置して、その時間を自己の研修の時間にあてると生徒もその方がすくわれるであろう。ただ単に図工の時間だから絵をかくといったやり方はこの際やめるべきである。

教師自身ここで自己のおかれているクラス担任という立場を今一度よく考えて、自分で図画工作の授業を研究するか、あるいは専科制の設置にふみ切るかのいずれかの時期がきているように思われる。

- 3) 専科制の設置の問題は定員問題に関連してくるが是が非でも積極的な態度を示していただきたい。
- 4) また専科制をとらない場合は図画工作科と他教科との有機的な結びつきによる授業を研究してみたらどうであろうか。

例えば、理科とデザイン、あるいは理科と工作又社会と鑑賞といった具合にである。算数とデザインでグラフのいろいろな表わし方などを工夫するのもよいであろう。

小学校では全課程であるだけに他教科と図画工作科の有機的なつながりはより効果があるのではなかろうか。

又、図画工作科の中では互いに領域内の関連性を結合して研究してみるのも興味深いことであろう。

VI あとがき

この紀要は毎年教育実習生を送り出す教師の立場から実習校の先生方の要求にもとづき、実習生にまとめた指導案をかかせ、生徒に対して適切な技術指導が出来ることを願いながらまとめたものである。

すなわち、昭和46年度から指導要領が改正されるにあたり小中学校を通じて新旧指導要領を比較検討する機会をえたので(但し今回は小学校編である)今までの経験と筆者が指導した実習学生の実績を参照しながら実習現場でただちに役立つように出来るだけ簡明を記したつもりである。また本稿が美術科教科教育の一助となることが出来れば幸である。